

2000・下水文化研究フォーラム “これからの人と水とのかかわり”

## 講演(2)・古代や中世の人と水の関わり

泌尿科学研究所 鈴木 和雄

### 一 生活と水

平城京前後の時代、即ち壬申じんしんの乱(六七二)から平安遷都(七九四)に至る期間の頃は、貴族を含む官人以外の庶民の生活では、川沼等の水辺に集落を形成していた。水を汲むところは『井』と言い、井とは水の集まる所の意であり、古くは弥生時代の集落にも割板を組んだり木をくり抜いたりして水を採った跡が残っている。

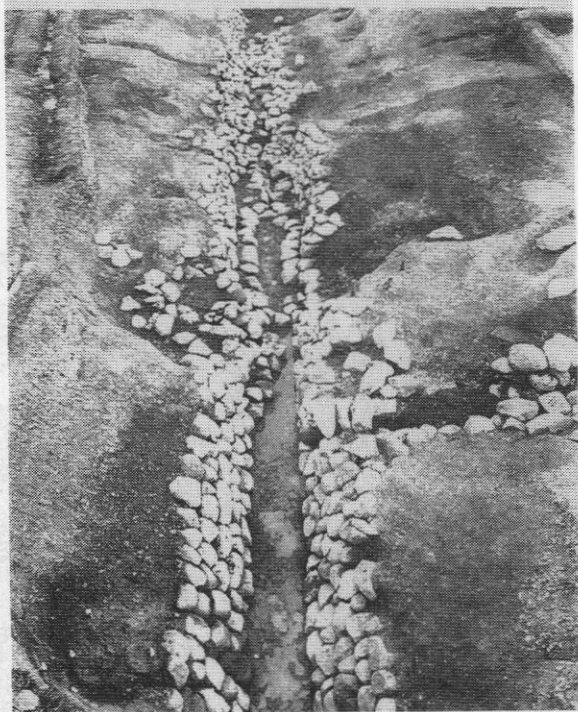
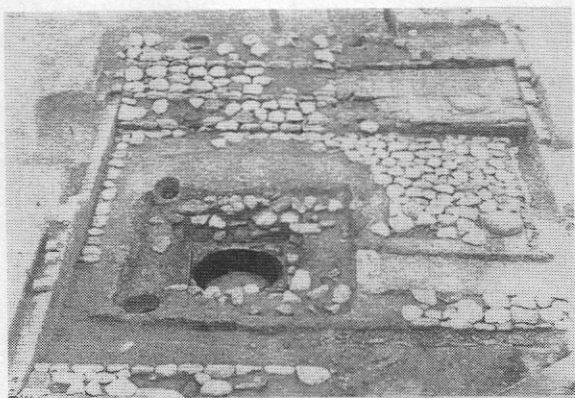
平城京では宮廷内に用土工事が行われて、さらに井戸の堀削があり、木桶による通水がされている。その井戸の深さは約二呎、一辺の長さ一・二呎の方形のものが多く見られる。

用土工事に女を加え、人手の確保と志気の高揚も図っている。およそ水場での水汲みは女の仕事

とされ、十四・五歳からといわれており、工事に女が加わるのも不自然ではない。

六世紀半ば、仏教伝来を契機として井戸掘り技術も伝わり人口の参集に従って水への需要も増え、さらに川を利用して舟運も盛んになっている。そして水への依存が人の排泄と微妙に、かつ深く関わっているのである。

現代との大きな相違は人口の希薄さであり、そして寿命の短さである。人生五十年は願望で多くは病や事故、天災等で若年死し、長寿は稀有けうである。従って排泄量も必然的に調整されていた。さらに鳥獣類、昆虫類の多様さは驚く程で、人を含めた総ての排泄物は生態系の絶好の資源でもあり、自然のサイクルに溶けこんでいた。



写真一 1 宮廷内への用水引込み  
(「日本の歴史4」ぎょうせい(株)出版S61年)

## 二 水の周辺

万葉集の中にも水と排泄物との関わりが二首載っている。その一つを挙げてみると『香塗流こりぬれる

とうになよりそ  
塔尔莫依 川隈乃 屎鮒契有 痛女奴』詠人は

忌部首で、字でも判るように、忌み嫌う不潔な

仕事をたばねている部所の長官の作である。『痛

き』は辛い労働をしている女奴隷であろう。仏体

に用いる香を塗っている塔に近よるな、というの

である。川隈かわくまは川の曲がり角で廁があつたのであ

ろう。糞を餌えさにしている魚を食べている女を指さ

している。

糞便は水に流し、風に飛ばし、地中に放置し、

そして生物の餌でもあつた。

## 三 衛生状況

飛鳥浄御原宮や藤原京の時代（六七二〜七一

〇）は近辺の河川から水路を引き、そこへ生活廃水を流していたが下流への配慮云々を言うより、

その必要は無かつた。要するにいたる所に流れがあつたし魚貝類が棲んでいた。

飛鳥川、米川、桜川、秋篠川があり、緩傾斜の扇状地帯で、飲料水に掘る井戸も浅井戸である。平城京の時代も衛生面や排泄行為では河川を最大限に利用している。

この時代の人口は他の生物と同様に自然界に大きく左右されていたが、朝廷では人口の増加をねが念い多産の婦女には褒章として乳母に金品を下賜している。産めよ殖やせよである。

糞尿の始末は貴族では邸宅の庭に埋め、庶民は家の周辺や道端であり、川の流れであつた。そして餌となり肥料ともなつてゆく。

## 四 住環境

人家の密集という想定も、肩を寄せ合っているという図とはほど遠い。

例えば平城京の碁盤目に区画された街衢がいくというと、軒をつらねた家屋を連想しがちだが、貴族の屋敷は、五位以上は一町歩（一六〇〇〇平方尺）、

四八〇〇坪)から四町歩(六七〇〇〇平方尺、二万坪)もあった。庶民の家ですら二五〇平方尺前後である。約七六坪である。但しこれは敷地だけで家屋となれば犬小屋同然である。多くはむき出しの土間であり、良くても筵敷むしろきであつたらう。

用水については貴族を含めた官人の家庭では、専用の井戸や川から引いた流れを使っているが、庶民の場合は川の流れや池、沼等の近辺で水を適当に使っていたようである。「ようである」というのは、記録としては庶民に関わるものは皆無であるので。世情から判断する以外にはないからである。

ちなみに官人と庶民とは厳しく差別されており、庶民は人語を解する動物としか見ていなかったようである。

例えば貴族の使用人が病気で働けなくなれば放逐されるだけであり、病気でなくても意にそわねば追い出される。妊婦も出産で働けなくなれば追い出される。彼等や彼女たちは寺院の軒下や縁の下で飢えを凌ぎ、自分の手で嬰兒を産む。産み

そこなえば産門に出かかったままで母子共に息絶えることもある。老衰して動けなくなれば卒塔婆の立つ墓地で死を待つしかない。犬やからすに食い荒らされるばかりである。

## 五 秀れた技術

古代や中世における官人の住居は先にも述べたように広大である。清筥しのはこに排出した大便おおつぼも虎子こにも入れた小便も広い敷地内に埋める所はいくらでもある。

官人、特に貴族ともなれば、日常の服装も巾廣はばひろの布を幾枚も重ね着しているのので、排便時には『きぬかけ』という鳥居形のものに掛けた。これが後世『きんかくし』になつたと言われているが、こじつけのようでもある。

便所の出現は鎌倉時代といわれるが、国内の生活は一律ではない。寺院に残された記録を鵜呑みにはできない。多分肥料として見直された江戸時代に入ってからであろう。

この時代は土木建設や鑄造の技術は秀れてお

り、水路開発、寺院仏閣、仏像の鑄造等は現在に残されているものを見ても刮目に値し、現代技術と十分に比肩し得る。そして既にサイホンの原理すら応用されているのである。

## 六 人と水と

二一世紀の科学技術がいかに進んでも自然を支配することはできない。人も生物の一種類にすぎない。その人間は他の生物の五〇倍の密度で繁殖し地球表面の四分の一の陸地にひしめいている。さらに地球上の全水量の僅か数パーセントに及ばない淡水を求めて争っている。

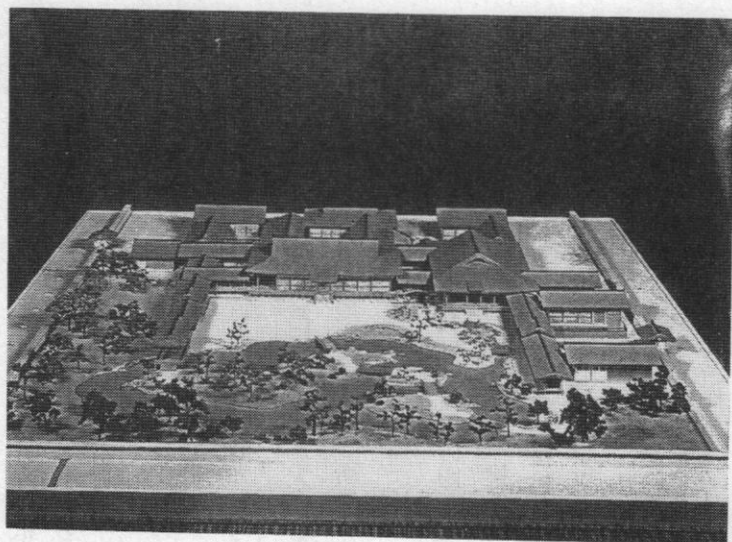
ただ、この生物は知恵を持っている。

水が足りないゝダムを造れゝ住民立ち退きゝ森林破壊ゝダム完成ゝダムの寿命ゝ生態系消滅？という構図にならないように、そして森林がどのくらい保水力を持っているか、もう一度考えてみてはどうだろうか。

自然の営みと調和し、中世における先人たちのように「水」を恵みとして受けとめる生活基盤を

振り返ることも必要ではないだろうか。

(平成二二年二月一日)



写真一 二 貴族の邸宅

(「日本の歴史4」ぎょうせい(株)出版S61年)